



本冊子は、管理された森林からの木材、間伐材、古紙再生材を合わせて100%となる森林認証を取得した用紙に、生分解しやすい植物原料インクで印刷して作りました。

(表紙: ECF/シルブ100%、本文: 再生紙70%以上+国内産間伐材10%以上)

地域交通出前講座シリーズ #5

～歩くひと、自転車や電車・バスに乗る人、本を読む人を応援します！～

交通・環境・まちづくり おすすめ図書

2011

■「地域交通出前講座シリーズ」とは？

毎日の生活に欠かせない身近な地域交通に関する最新情報や専門家の講演などに気軽に接していただけるよう、冊子やPDFなどにして配布する事業です。人と環境にやさしい地域交通について知るきっかけになりましたら幸いです。

■持続可能な地域交通を考える会 (SLTc) では…

◆人と環境にやさしい交通まちづくりに関する情報を発信しています。

- 生活道路の改善 (安全・安心・快適な歩行環境づくり、通過交通の管理)
- 自転車の活用 ●路線バス・鉄道・LRT ●低炭素型の地域づくり …など

◆市民団体・地域などをつなぐ連携づくりや、政策提言をしています。

◆まちを良くするために行動する市民の力に支えられています。

参加して、または会費や寄付で支えていただける方を随時募集中！

詳しくは本会ホームページにて → <http://sltc.jp/support>

地域交通出前講座シリーズ #5

交通・環境・まちづくり おすすめ図書2011

2010年 1月 30日 初版発行

2011年 9月 24日 3版 (2011年度版) 発行

編 者 持続可能な地域交通を考える会

発行者 井坂 洋士

© 2011 Sustainable Local Transit committee.

発行元

持続可能な地域交通を考える会 (SLTc)

〒211-0004 川崎市中原区新丸子東3-1100-12

かわさき市民活動センター レターケース5号

[URL] <http://sltc.jp/> [twitter] @sltcjp

[E-mail] query@sltc.jp [FAX] 020-4664-6084

持続可能な地域交通を考える会
Sustainable Local Transit committee, Kawasaki Japan.



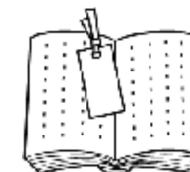
■ 目次

【はじめに】	1
ここが違う、ヨーロッパの交通政策	2
足田智の自転車生活スターティングBOOK	3
自転車の安全鉄則	3
鉄道で広がる自転車の旅―「輪行」のススメ	4
クルマ社会・7つの大罪	5
「都市縮小」の時代	6
まち路地再生のデザイン	7
一路地に学ぶ生活空間の再生術	
子どもが道草できるまちづくり	8
おばあちゃんにやさしいデマンド交通システム	9
モビリティ・マネジメント入門	10
道路整備事業の大罪―道路は地方を救えない	11
グリーン・エコノミー	12
一脱原発と温暖化対策の経済学	
【交通・環境・まちづくり 図書目録】	13



■各ページは下記の会員が担当しました：

2	山脇
4	野口
5, 6, 8	堀添
9, 10	高橋
3, 7, 11, 12	井坂



地域交通出前講座シリーズは、毎日の生活に欠かせない身近な地域交通に関する最新情報や専門家の講演などに気軽に接していただけるようお届けし、人と環境にやさしい地域交通に関する情報収集の一助になるよう企画・頒布しています。

■ はじめに

人と環境にやさしい地域交通の重要さに気づいた私たちが本会を立ち上げて3年半。この間にも交通・環境・まちづくり分野で様々な動きがありました。中でも今年3月の東日本大震災は、私たちに様々な被害と教訓をもたらしました。さらに原発災害により従来のエネルギー政策が破綻。震災直後の帰宅支援やマイカー渋滞が課題になるとともに、エネルギー政策の失敗が後々の復旧を妨げ、鉄道をはじめ私たちの生活に深刻な影響をもたらしています。

豪雨被害も深刻さを増しています。一昨年は名松線が、昨年は岩泉線などが不通になり、美祢線で1年ぶりに復旧見込みが立った矢先の今年は磐越西線、只見線、紀勢線などで橋梁流失等の深刻な被害が出ています。深刻な気象災害が頻発するようになった背景には、化石燃料に依存した経済の仕組みに起因する気候変動が指摘されています。地球環境問題も対岸の火事ではなく、すでに私たちの生活を脅かしていることを痛感させられます。

被災された方々や地域の1日も早い復旧・復興を願ってやみませんが、その復旧・復興に欠かせない路線バスや鉄道等の事業者も深刻さを増す災害の被害者でありながら、国などからの支援は限られ、経営難に直面しています。各社とも尽力され、ひたちなか海浜鉄道などのように辛うじて復旧にこぎ着いた所もあれば、三陸鉄道のように復旧の目途すら立たない所もある中で、神奈川新聞社が「復興応援写真集」を発売するなど、善意で支えようとする動きも出ています。震災直前に政府案が国会に提出されて継続審議中の「交通基本法」も、上記のような状況から、その役割への期待がますます高まっています。文字通り交通は足元から考え直す必要に迫られていると言えます。

『おすすめ図書』2011年度版では、**新刊5冊**の書評を新たに加えるとともに、巻末には書店や図書館で探し・取り寄せる際に便利な**図書目録**も収録しています。私たちの生活に欠かせない地域交通を維持発展させるためには、多くの人の関心と取り組みが欠かせません。地域交通が置かれた状況やその改善策について考え理解する際に、この冊子が参考になりましたら幸いです。

持続可能な地域交通を考える会 (SLTc)

代表 井坂 洋士



ここが違う、ヨーロッパの交通政策

1970年代のオイルショックの後、ヨーロッパではエネルギー政策が見直され、無数のマイカーによってもたらされる交通渋滞、大気汚染に目が向けられました。ヨーロッパの各都市は環境に配慮して市の中心部から車を排除または抑制する、様々な交通政策を実施するようになっていきます。

本書は、ヨーロッパを中心に催されているモビリティ・ウィークという交通週間、都市間で競うようにおこなわれているシビタスというプロジェクト、公道通過のクルマに課せられる渋滞税やフランス発祥の交通権などの様々な交通政策を最初の3章で紹介するとともに、環境負荷を抑えた自動車の開発競争に関する章と再生可能な燃料に関する章とを設けています。

最初の3章には、歩行者と自転車を優先する都市の事例が多数挙げられていますが、それらの施策の基礎には1982年フランスで制定された交通基本法があって、「すべての人が移動する権利」「交通手段を自由に選択できる権利」が保証されています。その流れがEU憲章に引きつがれヨーロッパ諸国に及んでいて、実施においては市民による事前審査が行なわれることもあります。

モビリティ・ウィークについて述べると、これは9月に催される、市民の健康や生活の質の観点から都市交通を考える交通週間です。その中心的なイベントはカーフリー・デーと呼ばれ、市民がクルマ無しの1日を体験することによって公共交通や自転車の利用を推進し、それらの環境整備を促そうというものです。

このモビリティ・ウィークを日本の交通安全週間と対比してみると、本書が都市交通に携わる行政や企業、学界の関係者だけでなく、都市交通に関心を持つ市民、学生に多面的で豊富な情報を提供することが分かるでしょう。



片野 優

ここが違う
ヨーロッパの
交通政策



街が変わる、楽しくなる!

環境に配慮した人間的都市生活を
送るための情報と提案。
官庁・自治体・学生・市民団体の必読書です。

白水社

片野優／白水社

2011年、ISBN 978-4-560-08124-2

足田智の自転車生活スターティングBOOK

足田智／ロコモーションパブリッシング 自転車生活ブックス4
2006年、ISBN 4-86212-035-0

今、環境にやさしく健康的で便利な自転車が人気だそうです。自動車は売れなくても自転車は売れていると聞きます。買い物や駅までの足としてはもちろん、職場まで自転車で行く人も増え、「ジテツウ」という言葉も聞くようになりました。定番のママチャリとは違う、走れる自転車に乗りたいという人が増えているようです。そんな人たちの強力な味方になりそうな本が、『足田智の自転車生活スターティングBOOK』。

自転車通勤を始めて人生が変わったという著者は、自転車を「使い」始めて若返った、そして東京がワタシのものになったと言います。たとえば、本文p29に自転車「使用前」「使用后」の比較写真が載っていますが、体重 84kg→68kgの圧倒的なダイエットを実現したのだとか。

でも、毎日乗る自転車だから、雨が降ったときは？ 手入れは？ 疲れにくい乗り方は？ いろいろ気になります。本書には、毎日自転車通勤をされている著者の経験から、自転車生活を楽しむためのいろんなコツが盛り込まれています。ちょっと本格的に自転車に乗ってみようと思ったとき、本書が手助けになってくれそうです。



自転車の安全鉄則

もうひとつ、自転車で気になるのは安全な走り方。自転車は車道？ 歩道？ いつも当たり前のように走っているけれど、実はどこを走ったらいいかもよく知らない……そんな人も少なくないかもしれません。歩道を走る人が多く、左右も構わず走ってしまいがちな自転車ですが、著者は自転車事故が増加していることを心配しており、事故の傾向を分析するとともに自転車活用先進国のオランダ、ドイツ、デンマークなどの事例も交えつつ、「自転車は左」という「安全鉄則」を徹底することから始めること、自転車は「左側通行さえ守れば、年間約400人の命を救える」ことを訴えます。

毎日乗る自転車だからこそ、安全に、安心して乗りたいもの。すでに自転車に乗っている人にはもちろん、正しく使えば健康に、環境に、そしておサイフにもうれしい良いことづくめの自転車利用をこれから始めてみようかと思った人にも、この2冊は頼もしい参考書になってくれそうです。

足田智／朝日新書147
2008年、ISBN 978-4-02-273247-7

鉄道で広がる自転車の旅 「輪行」のススメ

「輪行」と書いて「りんこう」と呼びます。昨今の健康とエコ志向に加えて、東日本大震災の影響も加わり、スポーツから通勤まで、様々な目的で自転車を利用する人が増えましたが、輪行もそのジャンルの一つで、鉄道に自転車を積んで旅行することです。本書はサイクリング未経験者から中上級者、鉄道ファンまで幅広い層をターゲットとした、輪行に関する分かりやすく楽しい内容の解説書です。

自転車の旅…には、ほろ苦い思い出があります。少年時代は自転車が好きで、ミヤタのランドナーの愛車を駆って、いつかは各地をツーリングしようと夢見つつ、週末毎に多摩川サイクリングロードを走ってきました。しかし、自動車免許をとり、社会人となるにつれて自転車から離れてしまい、いつしか愛車は車庫の片隅に朽ちるままとなり、家の建替えを機に手放してしまいました。

今、約20年の時を経て仕事で自転車に乗る機会が増えたことから、かつての自転車熱が復活し、どんな自転車を買おうかと物色中のところで本書と出会いました。著者とは同年代で名前も浩の字が同じというのも奇遇です。

体力に溢れ、社会人になる前でできなかった自転車旅行。本書で指摘されている通り、交通混雑を避けて都心を抜けつつ、限られた行動範囲・日数・体力によるツーリングには限界があります。ところが鉄道を利用する「輪行」では、そうした障害がほとんど取り払われることを知りました。また、本書では輪行に使用する自転車について、ロードバイクから折り畳み自転車までの長所短所と活用方法を丁寧に解説しています。さらに鉄道旅行の魅力と輪行のお勧めコースまで紹介していますので、単なる解説書としてではなく、旅行物としても十分に楽しめる著作となっています。

交通や環境問題に取り組み、クルマ社会からの脱却や公共交通・自転車利用促進を進める活動に取り組んでいます。こうした「趣味」を活かし、楽しむことで、交通に関するライフスタイルを変えることもできると気がきました。

なにはともあれ、さあ、自転車好き、旅好き、鉄道好きな方、本書を手にして、輪行に出てみましょう。おっとその前に
どの自転車を手にしましょうか。

田村浩／平凡社新書 520
2010年、ISBN 978-4-582-85520-3



クルマ社会・7つの大罪 アメリカ文明衰退の真相

増田悦佐／PHP研究所

2010年、ISBN 978-4-569-79020-6

「自動車普及の最大の理由は、アメ

リ国内の経済事情として永続的にブームが続くような耐久消費財産業が必要だったこと”。本書がそう指摘するように、必要だから作るというよりも、作ってから必要を生み出すというところから、様々な問題が生じてくる。もちろん、有用な面は大いにあり、クルマなしでは社会は成り立たない。しかし、売り手の利益が優先されすぎた結果どうなったか。本書は、そのうちアメリカで生じている主な弊害7つを取り上げる。これまでも多く指摘されてきた共同体の崩壊や文化の衰退などから、味覚やベトナム戦争帰還兵の問題など、クルマとは縁遠いような点も指摘されていて興味深かった。

経済事情とともに、人々のメンタリティの違いが、どのような車種が売れるかに反映されるかなど、日米の比較も随所に出てくる。その違いは鉄道の存続にも影響し、日本では大都市中心部での鉄道の繁栄が、犯罪発生率の上昇を非常に安上がりで効率的に防いでいるという。これらは実際にどうなのだろう。考えたり、話あったりできる素材も多い本だ。



クルマという巨大だがすべてではない道具で、アメリカ社会の一面を描き出す試みなので、やや強引かなと思われる部分もある。それでも冒頭のように、はからずも資本主義的生産様式自体の問題点も浮かび上がってくる。また本書は日本の現状や未来については楽観的過ぎる気もする。しかし、鉄道を筆頭とする公共財産が残っていることがどれほど大事か、その他あまりに普通すぎて意識してこなかった日本の強み(競争力ではなく)が実はどれだけあるか、そうしたことに関心を向けるきっかけになる本ではないかと思う。

「都市縮小」の時代

今、世界各地の都市で、人口減少と街の空洞化など「都市縮小」現象が起きているという。それにともない、治安の悪化、税収の悪化と行政サービスの削減、ひいては地域社会の崩壊など、看過できない問題が生じている。アメリカのある都市では、主要産業の衰えにより、40年で人口が17万人から8万人に減少した。街の中心部には空き家や廃ビルが目立ち、「時々空き家で死体が見つかるが、問題にもされない」という荒涼たる風景が広がる。本書は、このような危機的状況に対し、街の再生を果たそうと奮闘する各国各地域の取り組みを紹介する。その際、著者が提唱するのは、「発展や拡大」ではなく、「縮小を生かす」という方向だ。

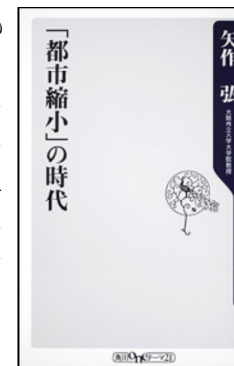
国の財政状況の厳しさが喧伝されて久しい。無駄を削るのも大切だが、新たな産業を興すなどもっと元気の出る解決策を考えたいのではないのか。そう思い込んできた自分にとって、本書の「賢く衰退する」というキーワードはまさに驚きだった。しかし、本書の言う「衰退」は、決して諦めの態度ではない。逆に、主体性や創意工夫をより必要とする積極的な姿勢だ。例として取り上げられているデトロイトを見てみよう。自動車都市として脚光を浴びたこの街は、その自動車自体によって「分断都市」に陥った。自動車優先で公共交通機関が失われ、富裕層が住む郊外と、貧困層の住む地域が隔絶されている。後者には放棄された宅地や工場跡地が4万区画にも上るといふ。

市当局がカジノ等の建設で再興をはかろうとしたところ、自動車会社の組合活動家や地域住民の運動により、そうした放棄地を農地として再利用する試みが行われている。目指されているのは、地域循環型の経済社会だ。消費するだけのクルマ生産偏重から、自分たちの手で働く場を生み出し、環境を守り、地域の絆を取り戻していく。莫大な利益とは無縁であるが、人間らしい生活がそこにはある。

果たしてこれから食べていけるのだろうか。多くの国民が不安を抱える中、本書の示す方向性は大きな希望をもたらす。同時に「都市縮小」の原因の解明も忘れてはならないだろう。例えば人口減少の原因として、勤労世帯の労働条件の劣悪化、保育園不足など子育て環境の不備といった、それ自体解決しなければならない問題も多い。自国の産業政策や企業の活動が、他国の国民に与えている影響も見逃せない。「都市縮小」現象を知ることきっかけに、改めてそうした問題についても考えていきたい。

矢作弘／角川oneテーマ21新書

2009年、ISBN 978-4-04-710218-7



まち路地再生のデザイン 路地に学ぶ生活空間の再生術

右の写真(表紙オビ)を見て、どんな感想を持つだろうか。懐かしい、昔を思い出す、歩いてみたい…または窮屈だ、古めかしい…人それぞれ、いろんな感想が出るだろう。本書は、こうした様々な思いが溢れる割りに忘れられがちな「路地」に焦点を当てた本だ。

国土交通省が今年「大街区化ガイドライン」を策定するなど、行政はこうした細街路は改善すべき対象と位置づけている。道路は拡幅すべきものであり、建物は大型化する方がよいとの考え方が主流だ。本書が「人々が地域で育みつくりあげてきた体験空間のデザイン」と言う細街路は壊して、地縁の無い「専門家」がデザインした空間に変える方が優れていると考えられているわけだ。

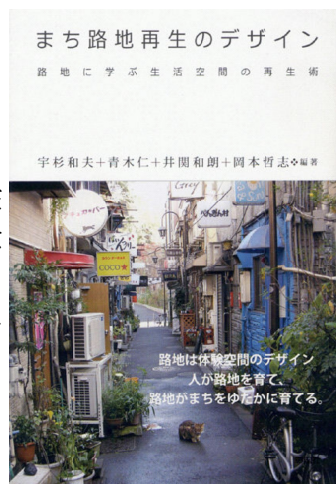
ところが、建築の専門家である本書の著者らは、むしろこれまで200年かけて築かれた路地にこそ持続可能性があり、21世紀の日本の都市・まちづくりの目指すべき姿だと訴える。いわばオルタナティブ(もうひとつの道)を提示している。

本書では、クルマの円滑な走行のための空間を「道路」、クルマより人のための空間を「路地」と区分し、この両者は似て非なるものだと言及する。そして、「路地」は決して劣った空間ではないと、様々な事例を示しながら訴えかける。

前半では、「路地」が歴史の中でどのように形作られたか、江戸期から現代にかけての日本のまちの形成を、「路地」に焦点を当てて説明している。後半では、「路地」の持つ魅力を具体的にどのように残し採り入れてゆくのか、国内外の事例を示しながら詳説している。建築の専門家が書いただけあり、都市計画の専門用語が出てくるなど一般には読みづらい部分もあったが、そうした箇所は流しながら読み進めても良いだろう。

私たちは、やもすれば「道路」の事ばかりを考え、「路地」を意識する事は少なかったのかもしれない。また都市計画の現場では、クルマや「ハコモノ」の話は頻繁に出て、街の主役である「人」に思いを馳せる機会がどれ程あっただろうか。本書が指し示す先には、私たちの「まち」の原風景とともに、目指すべき道が描かれているように思えるのだ。

宇杉和夫・青木仁・井関和朗・岡本哲志 編著
彰国社、2011年、ISBN 978-4-395-01021-9



子どもが道草できるまちづくり 通学路の交通問題を考える

本書は、地域の身近な「道」を子どもたちの手に取り戻すことを通じて、社会全体で子どもの成長を支えようと提起するものです。「社会全体での子育て」といって、保育園や学童保育の充実などが真っ先に思い浮かびますが、「道」や



「道草」も、子どもが育つためのとても大切な要素なのだと気付かされました。

そして過剰なクルマ依存が、その貴重な場を損なっていることも、様々な角度から明らかにされます。私自身、「道はクルマがまず使うもの」という先入観に縛られていたことを痛感しました。

子どもにとっては、大人の介入を受けないで、自由に遊びの拠点を移動できることがどれだけ大事か。いわば地域全体が遊び場であり、生活の場であってこそ、成長に必要な営みが可能になることを、本書は教え

てくれます。そのためには、物理的に、道を人が優先される場所にしなければならない。それはまさに社会全体で取り組まなければ、実現できません。逆にそのような苦勞を共にすること自体、社会のきずなを再生することでもあります。

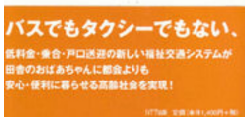
本書の執筆陣は、子どもをその過程の単なる客体にとらえてはいません。子どもはともに社会を変える仲間という想いが伝わってきます。問題発見・解決には、そうしたまなざしと想像力が不可欠であることも、本書は訴えているのではないかと思います。

仙田満+上岡直見・編／学芸出版社
2009年、ISBN 978-4-7615-2463-0



おばあちゃんにやさしい デマンド交通システム

『こうした仕組みをなぜ創り出せたのか。答えは簡単で、門外漢だから、交通事業者やシステム事業者の「できない理由」に耳を傾けないで、利用者である高齢者を中心とする需要サイドから最適な移動サービスは何かを純粋に追求できたからだと思っています』と著者が本書の中で語っている。



この新しい交通システムはすでに13県34の旧市町村（現、自治体数で32）地域で導入され、「全国デマンド交通システム導入機関連絡協議会」(*)が結成された。

※ <http://www.demand-kyougikai.jp/>

これはITを活用した乗合タクシーで、従来のバスとタクシーの利点を兼ね備えた公共交通サービスだ。電話予約（デマンド）で、登録すれば誰でもが移動できるという交通機関。発祥の地、福島県 旧小高町では、『安くて便利で楽しく生きがい運ぶ宝船』となった。街中の移動では100円で戸口から戸口へと送迎してくれる。郊外の自宅から街中へは1回300円。「今では一部地域の園児と小学校低学年の送迎を含めて1日平均120人以上、年間3万人程度が利用する地域にとって欠かせない交通システムになっている」という。本書では豊富な図解や表で具体的な収支状況も含め、成功までたどり着いた経緯を詳細に紹介している。

自家用車の台数が世帯数どころか住民人口を上回る地域も存在する今日、『ほとんどの住民が路線バス等を利用していない現状をデータで示した上で、真に公共交通を必要としている、いわゆる「交通弱者」にとって「望まれる交通とはどのような移動サービスなのか」を問いかけることからスタートすることになっています』と著者は訴える。

このシステムは、住民・行政・事業所の「三方一両得」が成立する、商工会議所、地域商店街、既存のタクシー会社を巻き込む市民運動にも似た取組だ。すでに人口10万人規模の地方都市でも導入されている。本書はコミュニティバス導入を模索する地域の人びとに「少子高齢社会における地域活性化に取組む上での実践的なケーススタディとして」格好な教科書となろう。

奥山修司／NTT出版

2007年、ISBN 978-4-7571-2202-4

モビリティ・マネジメント入門 「人と社会」を中心に据えた新しい交通戦略

我が国の二酸化炭素（CO₂）排出量のうち運輸部門は19.1%、その内自家用乗用車の割合は48.2%（2007年度統計）だ。CO₂削減にはクルマの利用を減らすことが欠かせない。ではどうクルマ社会を抑制していくか？



「クルマ利用をできるだけ控えたり、公共交通をできるだけ使うような“意識”を、行政の施策を通じて醸成していくなど、本当できるのだろうか」という疑問に答えるのが、本書だ。

『モビリティ・マネジメントとは、当該の地域や都市を、「過度に自動車に頼る状態」から「公共交通や徒歩などを含めた多様な交通手段を適度に（＝かしこく）利用する状態」へ少しずつ変えていく』一連の取組を意味するもの。

「特にオーストラリアや英国では、日本より一足早く、数万世帯、数十万世帯を対象とした大規模なコミュニケーション施策が展開され、大きな成果が上げられている」。

西オーストラリア州政府は2000年から10年間で64万人を対象とする計画を実施。総経費は約30億円。これは「4車線の道路をわずか7km整備する費用に等しい」。この1ドルの投資によって、ガソリン、CO₂、旅行時間の削減という社会的便宜が約13ドル得られるという。

ロンドン交通局では06年に20年計画をまとめ、25年までに4割の公共交通容量を増強し、9%の自動車分担率を削減する数値目標を掲げた。その社会的便宜の試算額は約40兆円。ロンドンの温室効果ガス削減目標値30%に対して、この施策によって、その22%削減が可能と想定されている。

西オーストラリア州パースではこの施策に約20名のスタッフを配置した。まずハガキを郵送。電話によるアンケートを実施して、自転車で個別訪問して「公共交通のお試しチケット」など個人に合った情報グッズを手渡す。その結果、南パース市では自動車に依存した45%、6,000世帯が興味ありと分類された。本書ではこんな内外の実例を紹介している。

『モビリティ・マネジメントにおいて目指すべき社会は、「クルマが無い社会」ではなく、「かしこくクルマとつきあう社会」なのだ、という点を忘れてはならない』

藤井聡・谷口綾子／学芸出版社

2008年、ISBN 978-4-7615-2426-5

道路整備事業の大罪

道路は地方を救えない

服部圭郎／洋泉社新書 y

2009年、ISBN 978-4-86248-436-9

道路財源の問題が出ると必ずと言っていいほど「道路は必要」という話が聞かれる。たしかに道路が全く無いのでは困るが、だからと言って全てが「必要」だと言うことにはならない。しかし道路整備計画が精査される事は稀で、私たちは悉く根拠もないのに何となく「道路は必要」と思い込んでいるのかもしれない。



都市・地方計画を専門にする著者は、道路統計などを分析しながら、諸外国との比較において日本は極めて道路密度が高くなっている事実を指摘。さらに、道路を造ったら寂れた町や、日用品の買物にも困る人の増加、公共交通の廃止、渋滞の悪化した事例などを紹介しているが、こうした事例は目から鱗を落としてくれる。今時は「道路整備で温暖化対策」などというビックリするような理由まで挙げているが、そのように様々な理由をつけて造られてきた道路をよく見てみると、その「効果」は根拠の無いものだったことが、3～4章で詳しく解説されている。

一方で、道路にあえて制約を加えたからこそ安全・安心・快適さを手に入れることのできた様々な事例が、5～6章で紹介されている。たとえば、クルマの速度を落とさせる工夫をして歩行者優先のまちづくりをしたら賑わった商店街、道路の拡幅をあえて行わずに観光客を増やした山間部の農村、再開発をせずクルマが入れないからこそ賑わっている下町の駅前商店街など、これまでの「常識」とは逆の実例がたくさんあることを思い知らされる。道路を「造る」ことに目が行きがちだが、逆に「造らない」事例に目を向けた文献は意外と少ないのではなかろうか。

著者は「道路に依存しないことが再生のチャンス」だと提言する。今までとは逆転の発想だが、これまでの道路依存、クルマ依存の経済・社会が行き詰まってきた今だからこそ、道路やクルマがもたらす弊害を前向きに見つめ直すことで、まちの良さを再発見できるのではなかろうか。

グリーン・エコノミー 脱原発と温暖化対策の経済学

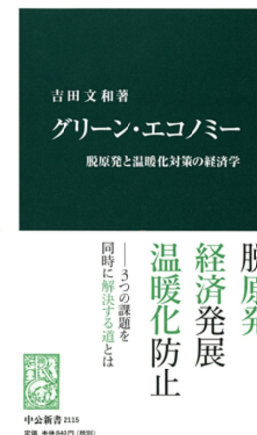
本書は、社会・経済の仕組みを「グリーン・エコノミー」(環境に調和する経済)に変えることで「持続可能な低炭素社会」をつくることを目指して書かれている。新書ながら読み応えがあり、読み始めの頃は全体像を掴みにく感じたが、丁寧に読み進めていくと味が出てくる本だと感じた。

前半では、日本を含めた世界経済が抱える課題を整理しており、例えばニュースで当然のように語られている「GDP」が必ずしも生活感に合っていないことを指摘している。交通混雑はガソリン消費を増やしGDPを増大させる一方で、快適度は減り、GDPの評価尺度に含まれていない大気汚染などを増加させる。このように私たちの生活感に近い所で解説しつつ、こうした問題に対処するためには、従来のGDPとは異なる、「よい生き方」と持続可能性に焦点を当てた目標と政策体系が必要だと提言している。

続いて、地球温暖化対策と脱原発と経済発展を併立させているデンマークやドイツなどの事例を紹介している。例えばドイツでは「気候変動対策なくして経済発展なし」との発想に切り替え、エネルギーばかりでなく、廃棄物や交通、雇用なども含めた諸政策を統合したことで、環境と経済発展の両立が実現したという。

一方、日本では産業界などから「省エネが進んでいる」「乾いた雑巾を絞るようだ」と宣伝されるが、本当だろうか？ 様々なデータを提示しながら、日本に足りないものはむしろエネルギー環境政策と社会保障政策、産業政策が連携し協力するための展望と努力であり、この最大の障害は、経済的な既得権益を得ている人間が、低炭素成長へと転換するために必要な政策に反対している事だと鋭く指摘している。

本書の冒頭に示された「技術は、人間社会の目的に対する手段である。手段にとらわれて目的を見失ってはならない。目的に対して手段が適合しないならば、別の手段を選ぶのも人間社会である。」という指摘を改めて意識したい。環境調和が欠かせない将来に向けた経済発展を考える際にぜひ参考にしたい一冊だ。



吉田文和／中公新書2115

2011年、ISBN 978-4-12-102115-1

■ 交通・環境・まちづくり図書目録

——本冊子の作成にあたり参照した本をご紹介します。

書名／ 著者名	出版社・シリーズ ISBN	発行年 ×=絶版	備考
歩行・生活環境			
Streets for People ―楽しく歩ける街― OECD 編、岡並木 監修	PARCO出版	1975.10 ×	
都市と交通 岡並木	岩波新書 黄155	1981 ×	
旅の軽さ 実相寺昭雄	淡交社 4-473-01199-2	1991.7 ×	
交通(日本史小百科) 荒井秀規 他	東京堂出版 4-490-20433-7	2001.6	
クルマを捨てて歩け 杉田 聡	講談社 +α新書 4-06-272085-X	2001.8 ×	
オープンスペースを魅力的にする―親しまれる公共空間の ためのハンドブック― / プロジェクト・フォー・パブリックスペース	学芸出版社 4-7615-1207-5	2005.11	
路地からのまちづくり 西村幸夫	学芸出版社 4-7615-3147-9	2006.12	
買物難民―もうひとつの高齢者問題 杉田聡	大月書店 978-4-272-36062-8	2008.9	
⑧ 子どもが道草できるまちづくり―通学路の交通問題を考える 仙田満・上岡直見 編	学芸出版社 978-4-7615-2463-0	2009.7	
都市の自由空間～街路から広がるまちづくり 鳴海邦碩	学芸出版社 978-4-7615-2471-5	2009.10	
⑦ まち路地再生のデザイン―路地に学ぶ生活空間の再生術 宇杉和夫・青木仁・井関和朗・岡本哲志 編著	彰国社 978-4-395-01021-9	2010.1	
フードデザート問題―無縁社会が生む「食の砂漠」 岩間信之 編著	農林統計協会 978-4-541-03767-1	2011.6	
自転車			
自転車市民権宣言―「都市交通」の新たなステージへ 石田久雄・古倉宗治・小林成基	リサイクル文化社 4-434-05607-7	2005.2	
③ 足田智の自転車生活スターティングBOOK―とりあえずワタシ はこうして走り出した― / 足田智	ロコモーションパブリッシング 4-86212-035-0	2006.2	
自転車利用促進のためのソフト施策―欧米先進諸国に学 ぶ環境・健康の街づくり― / 古倉宗治	ぎょうせい 4-324-08007-0	2006.12	
それでも自転車に乗り続ける7つの理由 足田智	朝日新聞社 978-4-02-257995-9	2007.8	
ベグリスト宣言!―40歳からの自転車快楽主義 斎藤純	NHK出版 生活人新書 978-4-14-088240-5	2007.12	
③ 自転車の安全鉄則 足田智	朝日新書147 978-4-02-273247-7	2008.11	

書名／ 著者名	出版社・シリーズ ISBN	発行年 ×=絶版	備考
自転車 つづき			
自転車をめぐる誘惑 足田智・ドロンジョース恩田	東京書籍 978-4-487-80328-6	2009.4	
自転車会議!―なぜ、各界のトップランナーは自転車を選ぶのか― 足田智・他	PHP研究所 978-4-569-77217-2	2009.9	
東京ぶらり自転車散歩 実業之日本社・編	実業之日本社 978-4-408-45240-1	2009.10	
もの×自転車悦楽 折りたたみ自転車で始める新しき日々 足田智	マガジンハウス 978-4-8387-2094-1	2010.4	
④ 鉄道で広がる自転車の旅―「輪行」のススメ 田村浩	平凡社新書 520 978-4-582-85520-3	2010.4	
コミュニティサイクル―公共交通を補完する新自転車システム 都市型コミュニティサイクル研究会	化学工業日報社 978-4-87326-569-8	2010.6	
成功する自転車まちづくり 古倉宗治	学芸出版社 978-4-7615-2491-3	2010.10	
輪行サイクリングのすすめ 鉄道と自転車の旅 田中真理	グラフィック社 978-4-7661-2218-3	2011.3	
自転車困った時の即効お助けマニュアル 足田智	成美堂出版 978-4-415-30995-8	2011.4	
明るい自転車相談室 足田智・ドロンジョース恩田	東京書籍 978-4-487-80553-2	2011.4	
公共交通(鉄道、軌道、バスなど)			
路線バスの現在・未来 鈴木文彦	グランプリ出版 4-87687-217-1	2001.1	
路面電車ルネッサンス 宇都宮浄人	新潮新書034 4-10-610034-7	2003.9	
ムーバスの思想 武蔵野市の実践 土屋正忠	東洋経済新報社 4-492-22252-9	2004.8	
定刻発車―日本の鉄道はなぜ世界で最も正確なのか? 三戸祐子	新潮文庫み35-1 4-10-118341-4	2005.5	
バスでまちづくり―都市交通の再生をめざして 中村文彦	学芸出版社 4-7615-2393-X	2006.10	
新・鉄道は地球を救う 上岡直見	交通新聞社 978-4-330-91007-9	2007.2	
⑨ おばあちゃんにやさしいデマンド交通システム 奥山修司	NTT出版 978-4-7571-2202-4	2007.9	
都バスの90年史 佐藤信之	グランプリ出版 978-4-87687-299-2	2007.12	
子ねことふしぎな電車 石上恵子	横浜にLRTを走らせる会 978-4-9904541-1-1	2008.1 直販のみ	
満員電車がなくなる日―鉄道イノベーションが日本を救う 阿部等	角川SSC新書029 978-4-8275-5029-0	2008.2	

書名／ 著者名	出版社・シリーズ ISBN	発行年 ×=絶版	備考
公共交通(鉄道、軌道、バスなど) つづき			
生活交通再生—住みつつけるための“元気な足”を確保する 土居靖範	自治体研究社 978-4-88037-522-9	2008.11	
生活支援の地域公共交通 秋山哲男・吉田樹 編著、猪井博登・竹内龍介 著	学芸出版社 978-4-7615-2455-5	2009.4	
可愛い子には鉄道の旅を—6歳からのおとな講座 村山茂	交通新聞社新書 978-4-330-07209-8	2009.6	
時刻表に見るスイス鉄道—こんなに違う日本とスイス 大内雅博	交通新聞社新書 978-4-330-07609-6	2009.6	
水戸岡鋭治の「正しい」鉄道デザイン 水戸岡鋭治	交通新聞社新書 978-4-330-08709-2	2009.8	
成功するコミュニティバス—みんなで創り、守り、育てる地域公 共交通／中部地域公共交通研究会 編著	学芸出版社 978-4-7615-1264-4	2009.11	
日本の鉄道をつかった人たち 小池滋	悠書館 978-4-903487-37-3	2010.6	
進化する路面電車—超低床電車はいつまで国産化されたのか 史絵、梅原淳	交通新聞社新書 978-4-330-14610-2	2010.6	
山手線と東海道新幹線では、どちらが儲かっているのか？ —JR6社の鉄道ビジネスのカ／中嶋茂夫	洋泉社 978-4-86248-582-3	2010.10	
バスマップの底力—作ろう・使おう・育てよう— 全国バスマップサミット実行委員会 編著	クラッセ 978-4-902841-06-0	2010.8	
LR1—一次世代型路面電車とまちづくり— 宇都宮浄人、服部重敬	成山堂書店 978-4-425-76181-4	2010.12	
昭和の鉄道—近代鉄道の基盤づくり 須田寛	交通新聞社新書 978-4-330-20811-4	2011.4	
つなかれノワルトレイン ひたちなか海浜鉄道—復興応援写真集 写真：杉崎行恭、坪内政美	神奈川新聞社	2011.6	
つなかれノワルトレイン 三陸鉄道—復興応援写真集 写真：冨手淳、他	神奈川新聞社	2011.6	
トラムとにぎわいの地方都市—ストラスブールのまちづくり ヴァンソ 藤井由実	学芸出版社 978-4-7615-2518-7	2011.9	
自動車・道路問題、交通政策			
マイカー亡国論 湯川利和	三一書房	1968 ×	
自動車の社会的費用 宇沢弘文	岩波新書 青890 4-00-411047-5	1974	
クルマ社会アメリカの模索 西村弘	白桃書房 4-561-71120-1	1998.7	
交通権憲章—21世紀の豊かな交通への提言— 交通権学会 編	日本経済評論社 4-8188-1077-0	1999.7	
クルマと道路の経済学 柴田徳衛・中西啓之	大月書店 4-272-14039-6	1999.9	

書名／ 著者名	出版社・シリーズ ISBN	発行年 ×=絶版	備考
自動車・道路問題、交通政策 つづき			
地球はクルマに耐えられるか—消費のハイウェイから人間の道へ 上岡直見	北斗出版 4-89474-015-X	2000.10	
世界は脱クルマ社会へ—逆行する日本 白石忠夫	緑風出版 4-8461-0014-6	2000.11	
自動車にいくらかかっているか 上岡直見	コモンズ 4-906640-52-4	2002.5	
小説 西益津村物語 クルマのない地域社会 北三平	文芸社 4-8355-4873-6	2002.12	
道路行政失敗の本質〈官僚不作為〉は何をもたらしたか 杉田聡	平凡社新書202 4-582-85202-5	2003.11	
市民のための道路学 上岡直見	緑風出版 4-8461-0409-5	2004.7	
交通政策の未来戦略—まちづくりと交通権保障とで脱「クル マ社会」の実現を—／土居靖範	文理閣 978-4-89259-536-3	2007.1	
脱クルマ社会の交通政策—移動の自由から交通の自由へ 西村弘	ニメルヴァ書房 978-4-623-04852-6	2007.4	
公共事業と市民参加 東京外郭環状道路のPIを検証する 江崎美枝子・喜多見ボンボコ会議	学芸出版社 978-4-7615-2406-7	2007.6	
脱・道路の時代 上岡直見	コモンズ 978-4-86187-038-5	2007.10	
⑩ モビリティ・マネジメント入門—「人と社会」を中心に据えた新し い交通戦略／藤井聡・谷口綾子	学芸出版社 978-4-7615-2426-5	2008.3	
クルマのない生活—フライブルクより愛をこめて— 今泉みね子	白水社 978-4-560-04079-9	2008.5	
「日本は先進国」のウソ 杉田聡	平凡社新書 978-4-582-85424-4	2008.6	
タクシーに未来はあるか <規制緩和と交通権 2> 戸崎肇	学文社 978-4-7620-1860-2	2008.6	
道路をどうするか 五十嵐敬喜・小川明雄	岩波新書 新赤1164 978-4-00-431164-5	2008.12	
脱・スピード社会—まちと生命を守るソフトカー戦略— 小栗幸夫	清文社 978-4-433-37379-5	2009.4	
⑪ 道路整備事業の大罪—道路は地方を救えない 服部圭郎	洋泉社新書y220 978-4-86248-436-9	2009.8	
高速無料化が日本を壊す 上岡直見	コモンズ 978-4-86187-068-2	2010.2	
⑤ クルマ社会・7つの大罪—アメリカ文明衰退の真相 増田悦佐	PHP研究所 978-4-569-79020-6	2010.8	
交通基本法を考える 交通権学会・編	かもがわ出版 978-4-7803-0410-7	2011.1	
② ここが違う、ヨーロッパの交通政策 片野優	白水社 978-4-560-08124-2	2011.4	

書名／ 著者名	出版社・シリーズ ISBN	発行年 ×=絶版	備考
まちづくり			
人と街を大切にドイツのまちづくり 春日井道彦	学芸出版社 4-7615-2224-0	1999.11	
快適都市空間をつくる 青木仁	中公新書1540 4-12-101540-1	2000.6	
なぜ日本の街はちぐはぐなのか ー都市生活者のための都市再生論ー 青木仁	日本経済新聞社 4-532-14968-1	2002.4 ×	
日本型魅惑都市をつくる 青木仁	日本経済新聞社 4-532-35087-5	2004.3	
人間都市クニチバー環境・交通・福祉・土地利用を統合したまちづくり／服部圭郎	学芸出版社 4-7615-2339-5	2004.4	
新しい自治体の設計 3 持続可能な地域社会のデザイン 生存とアメニティの公共空間 植田和弘 他	有斐閣 4-641-05362-6	2004.8	
ファスト風土化する日本ー郊外化とその病理ー 三浦展	洋泉社新書y119 4-89691-847-9	2004.9	
環境先進国ドイツの今ー緑とトラムの街カールスルーエから 松田雅央	学芸出版社 4-7615-2354-9	2004.12	
岩波講座 都市の再生を考える 5 都市のアメニティエコロジー 植田和弘 他	岩波書店 4-00-010977-4	2005.2	
大型店とまちづくり ー規制進むアメリカ、模索する日本ー 矢作弘	岩波新書 新赤960 4-00-430960-3	2005.7	
オープンスペースを魅力的にする プロジェクト・フォー・パブリックスペース	学芸出版社 4-7615-1207-5	2005.11	
脱ファスト風土宣言 商店街を救え! 三浦展 編著	洋泉社新書y152 4-86248-020-9	2006.4	
日本型まちづくりへの転換ーミニ戸建て・細街路の復権ー 青木仁	学芸出版社 978-4-7615-2408-1	2007.7	
フライブルクのまちづくり ソーシャル・エコロジー住宅地ヴォーバン 村上敦	学芸出版社 978-4-7615-2419-7	2007.12	
都市の魅力アップ 鳴海邦碩 編著	学芸出版社 978-4-7615-2425-8	2008.3	
バルセロナ旧市街の再生戦略ー公共空間の創出による境界の回復ー 阿部大輔	学芸出版社 978-4-7615-3171-3	2009.3	
サステイナブル・スイスー未来志向のエネルギー、建築、交通 滝川薫	学芸出版社 978-4-7615-2462-3	2009.5	
「都市縮小」の時代 矢作弘	角川oneテーマ21 978-4-04-710218-7	2009.12	
まちづくりのための交通戦略 ーパッケージ・アプローチのすすめ 改訂版／山中英生・小谷通泰・新田保次	学芸出版社 978-4-7615-3184-3	2010.2	
ドイツの地域再生戦略 コミュニティマネジメント 室田昌子	学芸出版社 978-4-7615-2485-2	2010.6	

(つづく)

書名／ 著者名	出版社・シリーズ ISBN	発行年 ×=絶版	備考
まちづくり つづき			
まちづくりを学ぶー地域再生の見取り図ー 石原武政、西村幸夫	有斐閣ブックス457 978-4-641-18390-2	2010.9	
ジェイコブズ対モーゼスーニューヨーク都市計画をめぐる闘い アンソニー・フリント 著、渡邊泰彦 訳	鹿島出版会 978-4-306-07289-3	2011.4	
まちづくり市民事業ー新しい公共による地域再生ー 佐藤滋	学芸出版社 978-4-7615-3191-1	2011.4	
地域の力が日本を変えるーコミュニティ再生と地域内循環型 経済へ／井上健二	学芸出版社 978-4-7615-2512-5	2011.7	
地球環境・エネルギー問題			
環境税とは何か 石弘光	岩波新書 新赤600 4-00-430600-0	1999.2	
石油の終焉ー生活が変わる、社会が変わる、国際関係が変わるー ノール・ロバーツ	光文社 4-334-96181-9	2005.5	
空海とアインシュタイン 広瀬立成	PHP新書388 4-569-64782-0	2006.3	
「石油の呪縛」と人類 ソニア・シャーマ	集英社新書375 978-4-08-720375-2	2007.1	
地球白書2007-08 クリストファー・フレイヴン 編著	ワールドウォッチジャパン 978-4-948754-28-7	2007.11	
環境首都コンテスト ハライフ研究所 編著	学芸出版社 978-4-7615-2453-1	2009.3	
地球温暖化 はばすべての質問に答えます! 明日香壽川	岩波ブックレット760 978-4-00-009460-3	2009.6	
グリーン・ニューディールで始まるインフラ大転換 ーエネルギー、 交通に、百年に一度の巨大マーケットが生まれる!／井熊均	日刊工業新聞社 978-4-526-06302-2	2009.7	
低炭素社会に向けた12の方策 藤野純一・榎原友樹・岩渕裕子	日刊工業新聞社 978-4-526-06331-2	2009.9	
低炭素経済への道 諸富徹・浅岡美恵	岩波新書 新赤1241 978-4-00-431241-3	2010.4	
地球環境の事件簿 石弘之	岩波科学ライブラリー170 978-4-00-029570-3	2010.5	
江戸に学ぶエコ生活術 アズビー・ブラウン 著、幾島幸子 訳	阪急コミュニケーションズ 978-4-484-11101-8	2011.2	
⑫ グリーン・エコバニー 脱原発と温暖化対策の経済学 吉田文和	中公新書2115 978-4-12-102115-1	2011.6	
脱原子力社会の選択 増補版ー新エネルギー革命の時代 長谷川公一	新曜社 978-4-7885-1245-0	2011.7	
低炭素社会のデザインーゼロ排出は可能か 西岡秀三	岩波新書 新赤版1324 978-4-00-431324-3	2011.8	
脱原子力社会へー電力をグリーン化する 長谷川公一	岩波新書 新赤1328 978-4-00-431328-1	2011.9	